

無能無藝の一筋

つちだりゆうたらう
土田龍太郎

芭蕉庵桃青翁四十四歳のとき、尾張より伊勢に入り年代りてやがて伊賀上野に遊びさらに須磨明石まで杖を引きしまでのことつぶさに述べりし道の記笈の小文てふ名にて今に傳はりたり。

貞享四年神無月、空定めなきころ旅立のはなむけありしこと記せるに先立ちて、桃青翁來し方を顧みつつ、さまざまに惑ひ惱めりしそのはてにからくも繋かれる狂句の一筋ばかりおのが身のつひのよるべとなり命のたつきともなれることゆゑを説けるところあれど、これさながら草子一篇の序のごとくになりたり。

百骸九竅に宿りておのが身をせむる風羅坊に筆を起し、造化に隨ひて造化に歸れとなりと言ひてとぢむるこの序、五百字にもたらねども、風雅によする志のもだがたきままに綴れる思ひひたぶるにて、讀むものの胸にうたた迫りくることただならず。さればこの序、蕉風俳諧の奥かに入らむにはおのづからよきしるべともなるべければ、この道に分け入らむとほりせるともがらの今に賞め尊ぶこと一方ならぬはむべことわりとこそ言ひつべけれ。

この序につきて説かまほしきことげにくさぐさあれど、そこにかたはしよりあげつらはむもえうなからまし。ことにわが目に立てるは、終に無能無藝にしていただこの一筋に繋れると言へるところなれば、今はただこの句ばかりをとりあげて日ごろ思へることをいささか述べてやみなむにはしかじとなむおぼゆる。

そも芭蕉翁みづからを無能無藝と言ひなせるは、いかなるゆゑにやあらむ、いぶかしき方なきにあらず。この翁の好めりしは、俳諧の一道のみにしもあらず。若くして藤堂蟬吟公に仕へしころより勵めりし才藝いと廣きにわたれりしがごとし。さらに、江戸下向の後、深川芭蕉庵に住か定むるに先立ちて、延寶のころ五年がほど水道工事に携りしことありとも言へり。後に著せる幻住庵記にても、さればある時は仕官懸命の地を羨みしこと記せれば、この翁に俗情かつてなかりしにあらず、世務にたえて疎かりしにてもあらぬこと明けきなり。

されば俳諧のほかおのが振ふべき器量なきままにせむかたもなくてからくも狂句の一筋にとりつきたりしにてはつゆあらず、おのが狂句によらではをさをさ至るまじきよなく高き境界のあることつとに悟りぬたりしこと疑ふべきにあらず。同じ序の内に、貫道するものは一なりと言ひて、わが身にたくらぶるは、和歌の西行、連歌の宗祇、繪の雪舟、茶の利休なれば、翁の志せる風雅の道のつひのはていとほるかにして、なみなみの藝能者のえ測りおよばむことさらにありとも思はれず。されば世のなまさかしら人にとりては、翁の風雅、人の暮しのみめなる方を助くるわざとはなりがたく、なにのえうもなく見ゆなれば、無能無藝と貶め言はざらむもはかりがたかるべし。かからむとかねて思ひまうけたりしかばこそ、あたかも先んずるがごとくに、無能無藝の一筋と唱へたりしにてもやありけめ。同じことを柴門辭にては、予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさからひて用ふるところなしと定かにことわりたり。

されば無能無藝の一筋とは卑下謙退の辭にてはよもあらず。矜恃の語なりともはた見なしがたし。ただおのが安心立命のおもむきをさりげなくふともらせるとき句といはばほぼことたりなむかし。

(令和二年五月七日受附)